DYNAMIS, **10** (2006), *1–26*

ツツバ語の指示代名詞

内藤　真帆

0.　はじめに

南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国は、83 の島々から構成される島嶼国である。このひとつ、ツツバ島で話されるツツバ語には、15 の指示代名詞が存在している。このうちの 12 は「ここ/そこ/あそこ」、「これ/それ/あれ」、「この/その/あの」のような話し手からの距離を基準とする場所や物、指定の指示代名詞である。そして残りは「上り側/下り側/横側」のような方向を表す指示代名詞である。

本論文の目的は、ツツバ語の指示詞の体系を示すこと、そしてオセアニア祖語や同じ系統の言語との比較を通して、方向を表す指示詞の基準を明らかにすること、このふたつである。

ツツバ語の指示代名詞は意味的、形態的な観点から次の 4 つに分類される。

(1) 日本語の「この/その/あの」にあたる指定の指示代名詞
(2) 日本語の「これ/それ/あれ」にあたる物を表す指示代名詞
(3) 日本語の「ここ/そこ/あそこ、この辺り/その辺り/あそこの辺り」にあたる場所を表す指示代名詞（具体的指示と抽象的指示）
(4) 日本語の「上側/下側/横側」にあたる方向を表す指示代名詞

本論文ではまず指示代名詞のうち、指定、物、場所を表す指示代名詞の基準と機能について、具体例を提示しながら説明する。続いて方向を表す指示代名詞について、これと相関関係にある移動動詞とオセアニア祖語を用いて考察を行う。

1.　指定の指示代名詞

指定の指示代名詞とは、名詞句の主要部に後続し、主要部を修飾する代名詞のことを言う。この指示代名詞には日本語の「この/その/あの」にあたる話し手からの距離を基準した指示機能のほか、前方照応（文脈指示）の機能がある。指示であるか前方照応

であるかは、文脈または指示のジェスチャーにより判断される。

以下は指定の指示代名詞を表にしたものである。近称 nende「この」には 3 つの異形態 nen, ne, n があり、遠称 leng「あの」には 2 つの異形態 le, l があるが、これらの交替規則については良く分かっていない。

表 1. 指定の指示代名詞

近称（この）	nende　nen　ne　n
中称（その）	nei
遠称（あの）	leng　le　l

一音節から成る指示代名詞 ne や le が名詞句主要部に後置されるとき、この指示代名詞のストレスは失われ、代わりに主要部である名詞のストレスの位置が一音節分後退する。ツツバ語は語末から数えて二音節目にストレスが置かれる言語であるため、このストレスの消失と後退により、音韻的には名詞と指示形容詞が一語であるかのようになる。なお場所や物を表す指示代名詞は最低二音節から成り、ストレスが失われることはない。

指定の指示代名詞が名詞句の主要部に後続し、主要部を修飾することは先に述べたとおりだが、厳密には拘束名詞を修飾することはできない。拘束名詞は「父、母」といった親族名称や「頭、腕」といった身体部位のように、所有者との緊密度が高い語であることが多く、これらは常に所有者を表す接尾辞に付加される (1)。指定の指示代名詞は拘束名詞の後ろに現れ、主要部を直接修飾できないだけでなく (2), (3)、拘束名詞に付加した接尾辞の後ろに現れることもできない (4)。

(1) lima-ku
　腕-1SG.POSS
「私の腕」

(2) *lima　<u>nen</u>-ku
　腕　DX-1SG.POSS

(3) *lima　<u>nen</u>
　腕　DX

(4) *lima-ku　<u>nen</u>
　腕-1SG.POSS DX

それでは以下に指定の指示代名詞の例を示す。

1.1. 近称

nende/ nen/ ne/ n　「この」

● nende

(5) Barnabas　mo=vora　na　ureure　nende
B　3SG.R=生まれる　PP　島　DX
「バナバスはこの島で生まれた」

● nen

nende の異形態 nen には、(6) のように上の nende と同じく名詞句の主要部を修飾する働きがあるが、それ以外にも関係節を導く働き、補文標識としての働きがある。以下にそれぞれの説明をする。

(6) mo=mboi　ino　nen
3SG.R=好き　物　DX
「彼はこれが好きなのです」

関係節を導く nen

たとえば英語では関係代名詞に主格、所有格、目的格といった格が関係し、ドイツ語ではさらに性が関係してくる。また人を先行詞に取るか、事物を先行詞に取るかといった先行詞の種類も関係する。ツツバ語では、関係節を導きうるのは先行詞や格に関わらず、指示代名詞 nen だけであり、これの異形態 nende や ne は関係節を導くことが出来ない。以下に先行詞が関係節の主語 (7), (8) と補語 (9)、付加語 (10) である例を示す。

先行詞が関係節の主語 ('who')

(7) nao　nno=r　ka=rtireti　tel　tamoloi　nen　ae
1SG　1SG.R=感じる　1SG.IR=話す　PP　人　DX　未来
a=va　vila
3SG.IR=行く　V
「ヴィラに行くこの人と話をさせてください」

(8) men　ululndunna-n　tanume-i　nen　mo=lsu　tamoloi
DX　話-LINK　悪魔-REF　DX　3SG.R=殺す　人
「これは人を殺す悪魔のお話です」

先行詞が関係節の補語（'whom'）

(9) Nna　ma=ndavsai　bitinoi　nen　nno=sola
3SG　3SG.R=知る　赤ん坊　DX　1SG.R=抱く
「私が抱いている赤ん坊のことを彼はすでに知っている」

次の例のように関係節の付加語が先行詞であるとき、付加語が置かれていた位置には、場所を表す前方照応の aia が痕跡として残される。

先行詞が関係節の付加語（where）

(10) ima-i　mel　nen　nno=lo=eno　aia
家-REF　DX　DX　1SG.R=PROG=横になる ANA
「私が寝泊りしているのはあの家です」

関係代名詞として機能する nen は省略可能であり、省略されると主節と関係節が並置される（11），（12）。ツツバ語では接続詞も省略可能であり（13）、接続詞の省略と関係代名詞の省略は、プロソディーにより区別される。関係代名詞が省略されている文では、先行詞である語の語末にかけてプロソディーがわずかに上昇するのに対して（11），（12）、接続詞が省略されている文では、並置された二節のうち、先行する節のプロソディーが節の終わりにかけて下降するという違いがあるからである（13）。

(11) [nno=ndavsai　tamoloi] 主　[ma=sasa　na　sikul] 関
1SG.R=知る　人　3SG.R=働く　PP　学校
「私は学校で働いている人を知っています」

(12) [sakele-i　nei] 主　[o=lo=ate　aia　ma=kame-a] 関
椅子-REF　DX　2SG.R=PROG=座る　ANA　3SG.R=壊す-ITR
「あなたが座っているその椅子は壊れています」

(13) …mo=lsu　ra-inol　[ma=va　ma=mburai=ra] 節 1
3SG.R=殺す　PL-物　3SG.R=行く　3SG.R=捨てる=3PL.OBJ
[ro=ndanga] 節 2
3PL.R=臭う
「彼はそれらを殺し、捨てに行った。そしてそれらは腐った」
*「彼らはそれを殺し、腐ったそれらを捨てに行った（関係代名詞の省略として解釈した場合）」

指示代名詞 nen には関係代名詞としてだけでなく、補文標識としての働きもある。

(14) nno=ng　ka=ndavsai　nen　ko=le　bahe-i
1SG.R=望む　1SG.IR=知る DX　2PL.R=取る　鮫-REF
ko=l　sain?
2PL.R=取る　どのように
「私はどのようにしてあなた達がこの鮫を仕留めたのか知りたい」

また次の例文（15），（16），（17）のように、場所や時間を表す名詞の前に現れ、前置詞として働くことがある。

(15) sumbe-i　me=reti　nna　me=r　tamoloi
首長-REF　3SG.R=話す　3SG　3SG.R=言う　人
a=ria=sa　Olotu　nen　nanov
3SG.IR=義務=行く　サント島　DX　昨日
「首長は彼に昨日サント島へ行くべきだったと言った」

(16) nen　na　lo-n　ima-i　ma=alualu　varea　ma=mariri
DX　ART 中-LINK　家-REF　3SG.R=暑い　外　3SG.R=冷たい
「家の中は暑いが外は涼しい」

(17) ka=ria=va　na　USP　nen　Olotu
1SG.IR=義務=行く　PP　USP　DX　サント島
「私はサント島の USP（大学）に行かねばならない」

以上、nen の働きについて見てきたが、続いて異形態 ne と n の例を示す。これらの語には上の nen で見た関係節を導く、補語標識になる、前置詞として働くなどの機能はない。

● ne

(18) sun　ne　me=te　no-ku
帽子　DX　3SG.R=NEG　CLASS-1SG.POSS
「この帽子は私のものではない」

● n

(19) nna　me=ve　ima　n
3SG 3SG.R=作る　家　DX
「彼がこの家を建てた」

1.2. 中称 nei「その」

中称の nei は、修飾の対象物が話し手よりも聞き手の近くにあるとき/居るときに用いられる。

(20) o=lo=rongo!　tamoloi　nei　tamol　siati
2SG.R=PROG=感じる　人　DX　人　悪い
「気をつけなさい!　その男の人は悪い人よ」

(21) bula-ku　vir　nei
CLASS-1SG.POSS　犬　DX
「私が飼っているのはあなたの近くに居るその犬です」

1.3. 遠称 leng/ le/ l「あの」

遠称の leng、異形態 le と l は、修飾の対象物が話し手と聞き手の両方から遠いところにあるとき/居るときに用いられる。

● leng

(22) tamoloi　leng　no-man　sumbe
人　DX　CLASS-1PL.INC.POSS　首長
「あの人はわれわれの酋長だ。」

● le

(23) nno=an　noannan-nde　bimbimbi　le
1SG.R=食べる　食べ物-REF　包み　DX
「私はあの包みの中身を食べた。」

● l

(24) nna　me=ve　ima　l
3SG　3SG.R=作る　家　DX
「彼はあの家を建てた」

指定の指示代名詞 leng/ le/ l「あの」が sio「年」を修飾するとき、名詞句 sio leng は「あの年」ではなく「来年」の意味になる。これは話し手と聞き手の両方から距離があることを意味する leng が時間にまで拡張された例である。指定の指示代名詞には

(26) に示すように前方照応の機能もあるが、この名詞句 sio leng は慣用句化しており、聞き手が前方照応と混同することはない[1]。

(25) ve-tasi-ku　etea　lo=to　Vila　ae　a=ma
女性-兄弟-1SG.POSS　1　PROG=いる　V　未来　3SG.IR=来る
tel-ei=ao　na　sio　leng
pp=1SG.OBJ　PP　年　DX
「ヴィラにすむ私の妹は、来年私に会いに来てくれる」

前方照応

(26) tanume　leng　lo=to　aima　isa-na　ise?
悪魔　DX　PROG=いる　家に　名前-3SG.POSS　誰
「家にいるその悪魔の名前はなあに？」

2. 物を表す指示代名詞

先に見た指定の指示形容詞 nende「この」, nei「その」, leng「あの」に接頭辞 me- が付加すると、物を表す指示代名詞 me-nende「これ」, me-nei「それ」, me-leng「あれ」が派生される。この指示代名詞は単独で文の主語または補語になりうる。

以下にその指示代名詞を示す。話し手に近い me-nende「これ」と話し手と聞き手の両方から遠い me-leng「あれ」にはそれぞれ複数の異形態が存在するが、聞き手に近い me-nei「それ」には異形態が存在しない。

表 2. 物を表す指示代名詞

近称（これ）	me-nende　me-n
中称（それ）	me-nei
遠称（あれ）	me-leng　me-le　me-l

以下にそれぞれの例を示す。

[1]「昨年」を表す句には指示代名詞が用いられず、話し手から横方向に遠ざかることを表す移動動詞 vano/va「横切る、行く」が用いられる。この移動動詞については 4.1.1 で扱う。
nno=ma　tutuba　na　sio　ma=va
1SG.R=来る　ツツバ　PP　年　3SG.R=行く
「私は去年もツツバ島に来ましたよ」

2.1. 近称　me-nende/ me-n「これ」

● me-nende

(27) me-nende　mo=tuai
　DX　3SG.R=古い
「これは古い」

● me-n

(28) me-n　me=te　no-ku　sun
　DX　3SG.R=NEG　CLASS-1SG.POSS　帽子
「これは私の帽子ではない」

(29) ma=tarao　me-n!
　3SG.R=熱望する　DX
「彼はこれを待っていたんだよ！」

2.2. 中称 me-nei「それ」

● me-nei

(30) me-nei　boi　ila
　DX　豚　野生の
「(あなたの近くに居る) それは野生の豚です」

(31) me-nei　mo=ndui
　DX　3SG.R=良い
「それおいしい？」

2.3. 遠称 me-leng/ me-le/ me-l「あれ」

● me-leng

(32) village　no-nda　ma=lavoa　me=seu
　村　CLASS-1PL.INC.POSS　3SG.R=大きい　3SG.R=勝る
　me-leng
　DX
「私たちの村はあれよりも大きい」

● me-le

(33) o=malei　　me-le
2SG=望まない　DX
「あれはもういいの？」

● me-l

(34) me=ndere,　me-l　mo=ndui
3SG.R=違う　DX　3SG.R=良い
「いや、あれはいいんだよ」

3. 場所を表す指示代名詞

場所を表す指示代名詞にも、指示形容詞や物を表す指示詞のように、話し手からの距離を基準とする「ここ、そこ、あそこ」という 3 つの区分がある。しかし日本語の「(今、私が立っている) ここ」や「(教会のある) あそこ」のように頭に描く具体的な一地点を伝える場合と「このあたり」や「そのあたり」のように、話し手が漠然と一定の範囲をさして場所を伝える場合とが区別されるため、場所を表す指示代名詞には計 6 つの区分が存在しているといえる。本論文では前者の指示代名詞を具体的、後者の指示代名詞を抽象的とよぶことにする。具体的、抽象的という意味の違いは接頭辞で表されており、具体的な場所を表す語には先に見た指定の指示代名詞に、接頭辞 ha-が、抽象的な場所を表す語には接頭辞 ne-が付加する。ただし抽象的な遠称だけはこれにあてはまらない (3.3 参照)。

表 3. 場所を表す指示代名詞

近称（ここ）	具体的	ha-nende	ha-ne	ha-n
	抽象的	ne-nende	ne-ne	ne-n
中称（そこ）	具体的	ha-nei		
	抽象的	ne-nei		
遠称（あそこ）	具体的	ha-leng	ha-le	ha-l
	抽象的	ne-na	ne-natu	

以下にそれぞれの例を示す。

3.1. 近称

具体的近称 ha-nende, ha-ne, ha-n「ここ」

● ha-nende

(35) nno=ma ha-nende matan ka=reti na leo-n
1SG.R=来る DX CONJN 1SG.IR=話す ART 言葉-LINK
Mey tel-ei=o
M PP-OBJ=2SG.OBJ
「私はメイの伝言を伝えるため、ここにやって来ました」

(36) Veoa asao ha-nende
V 遠い DX
「ここからヴェオアまでは遠い」

● ha-ne

(37) nno o=te=ndavusai o=to ha-ne
2SG 2SG.R=NEG=出来る 2SG.R=居る DX
「あなたがここに住むことは出来ない」

● ha-n

(38) ro storen me=ev ha-n
CONJN 話 3SG.R=終わる DX
「お話はここでお終い」

抽象的近称 ne-nende, ne-ne, ne-n「ここ」

● ne-nende

(39) o=lo=to ne-nende nno=ase=o?
2SG.R=PROG=居る DX 2SG=自分で=2SG.OBJ
「あなたはここに１人で住んでるの？」

● ne-ne

(40) e=ma ne-ne!
2SG.IMP=来る DX
「ここにおいで」

● ne-n

(41) sai　ne-n
　何　DX
「これはなに？」(直訳:　何がここにありますか？)

3.2. 中称

具体的中称　ha-nei「そこ」

(42) mango　me=rei　ha-nei?
　マンゴー　3SG.R=存在する　DX
「そこにはマンゴーがありますか？」

抽象的中称　ne-nei 「そこ」

(43) tanga-i　no-ku　ne-nei
　鞄-REF　CLASS-1SG.POSS　DX
「私の鞄はそこにあります」

3.3. 遠称

先に 3. で「場所を表す指示代名詞における具体的、抽象的という意味の違いは接頭辞で表され、具体的な場所を表す語は、指定の指示代名詞に接頭辞 ha-が付加し、抽象的な場所を表す語は師弟の指示代名詞に接頭辞 ne-が付加して表される」と述べたが、抽象的遠称だけはこれに当てはまらない。接頭辞 ne-は遠称の語根 leng に付加せず、形態素 natu に付加する。この形態素 natu は、次章で説明する方向を表す指示代名詞の語根であることから、ne-natu/ne-na を方向を表す指示代名詞に分類するのが妥当であるとも考えられる。しかしながら、ne-natu は、方向を表す指示代名詞とは異なり、特定の方向を示唆しないという意味的な違いがあるため、方向ではなく、場所を表す指示代名詞に分類することにする。

抽象的遠称　ne-natu/ ne-na「あそこ」

● ne-natu

(44)ha-le　ne-natu
　DX　DX
「ほら、あそこ、あの辺り」

● ne-na

(45)tamoloi　l　ne-na　nna　sumbe
人　DX　DX　3SG　首長
「あそこに居るあの人、彼は首長だよ」

具体的遠称　ha-leng/ ha-le/ ha-l「あそこ」

● ha-leng

(46)nno=vol　te　raisi　ha-leng
3SG.R=買う　ART　米　DX
「私はあそこで米を買った」

● ha-le

(47)boi　ila　lo=to　ha-le
豚　野生の　PROG=居る　DX
「野生の豚ならあそこに居るよ」

● ha-l

(48)ha-l!
DX
「(指をさして) あそこさ！」

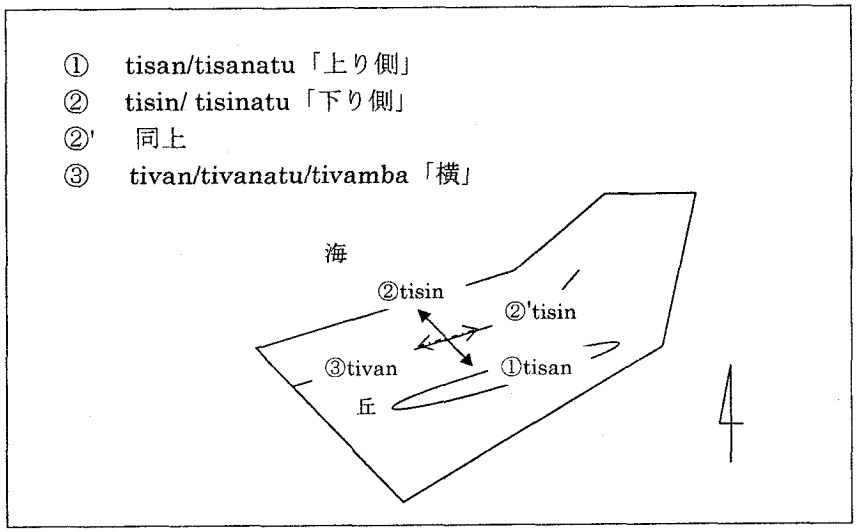
4. 方向を表す指示詞

これまでに上で見てきたツツバ語の指定や物、場所を表す指示代名詞「この/その/あの、これ/それ/あれ、ここ/そこ/あそこ」の基準は、日本語と同じく話し手からの距離であった。ところがツツバ語には、話し手からの距離を基準としない指示代名詞が存在する。それが方向を表す指示代名詞である。本章では、先行研究や再建されたオセアニア祖語を基に、ツツバ語の方向を表す指示代名詞の基準を示す。なお本稿は指示代名詞をテーマにしたものであるが、引用や比較に用いる先行研究が全て移動動詞を対象にしているため、必要に応じて指示代名詞と相関関係にあるツツバ語の移動動詞を用いて考察を行う。

4.1 島内の方向表現

ツツバ島には、島の南東と北西を結ぶ一本の平坦な道が海岸線沿いに走っている。そして海岸から道を隔てて逆方向には、道と平行に丘が広がっている。ツツバ語には、小高い丘の方向をさす① tisan/tisanatu「上り側」、海の方向と道の一方向をさす② tisin/tisinatu「下り側、横側」、そして道の他方向をさす③ tivan/tivanatu/tivamba「横側」という 4 方向を表す 3 つの指示代名詞が存在している。次の図はそれぞれの方向を矢印で表したものである。なお海と道の一方向は同じ語で表されるが、下の図では便宜上、海の方向を②、道の方向を②' としている。

図 1. ツツバ島内の方向表現



地図上では tisan/tisanatu「上り側」が南東方向にあたるが、この言語では「上り側」が南東の方向を意味するというわけではない。これはツツバ語の「上り側」、「下り側」という表現が、ヨーロッパやアジア地域の言語で用いられる絶対的な方角、すなわち「北」や「南」などとは結びついていないためである。たとえばツツバ島の中腹には丘が、四方には海が広がるため、丘から「下り側」と言うときは、話し手の位置から 360 度、すべての海岸方向が示唆される。逆に海側から「上り側」と言った場合、話者がど

の地点にいるかにより示唆される丘の方角は東西南北、いずれにもなりうる。ただしtivan「横側」だけは地形や話し手の位置に関らず、常にツツバ島の一定方角、すなわち南西（西）にあたる。以上をまとめると、土地の上下（高低）を基準とする①「上り側」と②「下り側」は特定の方角と結びつかないが、③「横側」だけは南西の方角と結びついている、といえる。

ツツバ語では横方向②' と海方向②に同じ語（tisin/tisanatu）が用いられるが、オセアニア祖語やヴァヌアツのAmbaeで話される言語（Hislop 2001）など同系統の近隣諸語では、横方向と海方向が異なる語で表される。なぜツツバ語では一語が海と横の二方向を示すのか、その理由をオセアニア祖語とツツバ語の移動動詞の比較、ツツバ語の歴史から示す。

4.1.1 移動動詞

ツツバ語の三つの指示代名詞と移動動詞との間には意味的、形態的な関連が見られ、指示代名詞は移動動詞から派生したものであると考えられる。以下にRoss（2004）が再建したオセアニア祖語の移動動詞とそれに由来するツツバ語の移動動詞、指示代名詞を示す（Araki 2004）。

オセアニア祖語の移動動詞
*sake「上方向に、丘の上の方へ、島の（真ん中に）向かって行く」
*sipo 「下方向に、海のほうに向かって丘を下る」
*pano「話し手から離れていく、横切る、
（丘に）上る，（丘を）下る　のどちらでもない」

続いて祖語に由来するツツバ語の移動動詞と指示代名詞を示す。

POc	ツツバ語の移動動詞	指示代名詞
*sake >	sae/sa「上る」	tisan/tisasatu「上り側」
*sipo >	sivo/si「下る	tisin/tisinatu「下り側」
*pano >	vano/va「行く、横切る」	tivan/tivanatu/tivamba「横」

祖語とツツバ語の移動動詞を比較する前に、ツツバ語の移動動詞と方向を表す指示代名詞との相関関係について簡単に説明する。

ツツバ語の移動動詞sae, sivo, vanoにはいずれも語頭の一音節から成る異形態sa,

si, va がある[2]。前者は補語を必要としないが（49）、後者は方向を表す指示代名詞や、目的地を表す alao「海岸」や olotu「サント島」などの普通名詞や固有名詞を必要とする。ただし意味的に矛盾する名詞を補語にとることはできない。たとえば 3 つの移動動詞のうち、sae「上る」の異形態 sa は似た意味の指示代名詞 tisan/tisanatu「上り側」や auta「丘/畑」とは共起できるが（50）、指示代名詞 tisin/tisinatu「下り側」や水平方向を表す tivan/tivanatu/tivamba「横」、必然的に低地を意味する alao「海岸」とは共起することができない（51），（52）。

(49)ka=sae
　1SG.IR=上る
「私は上る」

(50)ka=sa　　tisan
　1SG.IR=上る　上り側
「私は上り側に行きます」

(51)*ka=sa　　tisin
　1SG.IR=上る　下り側

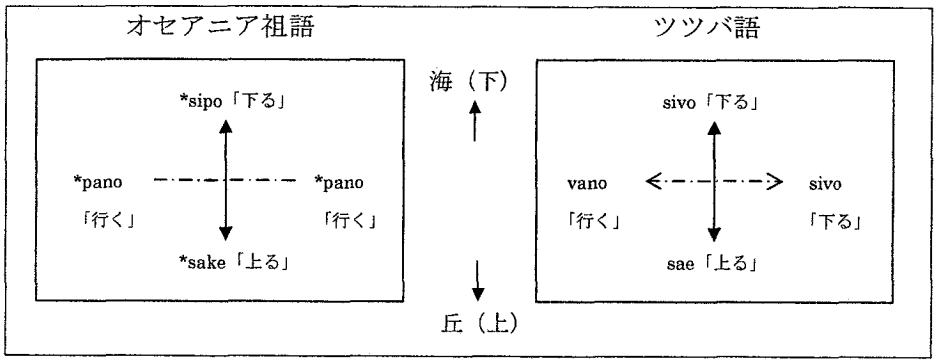
(52)*ka=sa　　tivan
　1SG.IR=上る　横

4.1.2 祖語との比較

図 2 は、オセアニア祖語とツツバ語の移動動詞が示唆する方向を矢印で表したものである。図では海と丘の方向を実線、道を破線で表し、二つの線が交わる位置に話し手が居ると仮定してそこからの移動がどの移動動詞で表されるかを記している。なお次の図 2 のうち、オセアニア祖語の方は François（2004: 17）の Figure7 を上下反転させたものを引用している。

[2]本稿では煩雑になるのを防ぐため、今後特に必要がない限り異形態を示さず、sae, sivo, vano を用いる。

図 2. 祖語とツツバ語の移動動詞



祖語では上への移動を表す*sake「上る」に下への移動を表す*sipo「下る」が対立し、横の移動を表すのが*pano「横切る」の一語であるのに対し、ツツバ語では下の移動だけでなく横の移動を表す語にも、*sipo「下る」に由来する sivo「下る」が用いられている。つまりツツバ語の sivo で表現される移動の範囲は祖語の*sipo に比べて広く、横の移動を表す vano（<*pano）「横切る」の示唆する範囲が祖語よりも狭いということである。移動動詞と相関関係にある、方向を表す指示代名詞が示す範囲も同様である。なぜツツバ語では下り側を意味する sivo「下る」が海方向と横方向の二方向に用いられるのか、考えうる理由を以下に示す。

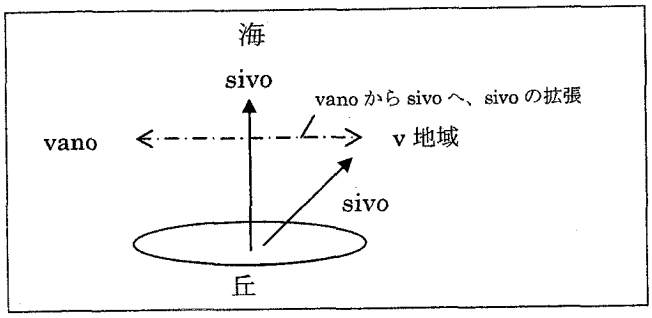
ツツバ島では宣教師が 20 世紀の半ばに島にやってくるまで、人々は丘の上に住居を構えていた[3]。宣教師は島の北東に位置する海岸沿いの低地 Veoa 地域に滞在して布教活動を行い、島の人々は彼らの到来により丘を降りて海岸沿いに居住するようになった。丘から Veoa 地域へは下り方向であったため、人々は sivo「下る」を用いていたと推測される。

宣教師の到来する前、ツツバ島でも海側、丘側といった土地の傾斜が関係しない移動、つまり図 3 の点線で示した水平な横の移動は、再建されたオセアニア祖語と同様、方向に関わらず vano であったと考えられる。しかし海岸沿いに移住した人々に Veoa 地域の方向を表す語として sivo が引き続き用いられた結果、この意味が拡張されて Veoa 方向の横の移動を表す語としても定着した。そして Veoa とは逆の方向への移動には依然 vano が用いられたことから、結果として vano と sivo が横の移動において対をなす

[3]資料が残されていないため、宣教師到来の年代など詳しいことは良く分からない。宣教師の到来した年代、場所、人々の移動に関する本論文中の記述は数名の高齢者（70 台後半）の話に基づいている。なお彼らの多くは敬虔なキリスト教信者である。

ようになった（図 3）。

図 3. sivo の拡張



以上の理由により、ツツバ語では sivo が二方向への移動を表し、本来オセアニア祖語の*pano のように vano がカバーすべき領域においても sivo が用いられるようになったと考えられる。これは sivo「下る」に呼応する指示代名詞 tisin/tisinatu「下り側」が海と横の一方向を表す理由でもある。

4.2 他島への移動

オセアニア祖語の話者は陸地に居るとき、土地の高低を基準として移動の方向を伝え、それは祖語に由来するツツバ語でも同様であった。では祖語話者、ツツバ語話者は島を離れて海を移動するとき、もし視界に島がなければどのようにして自分たちの進行方向を知りえたのだろうか。

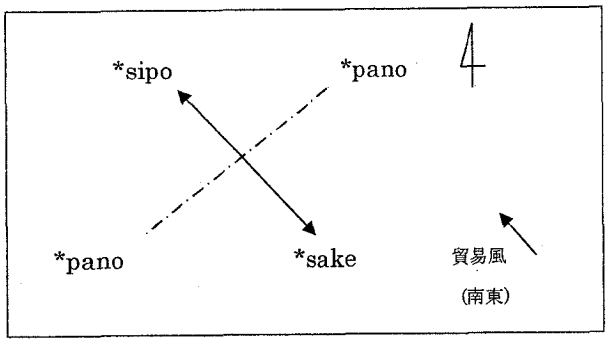
François（2004）は、海上では太陽の昇り降りを地理的判断の参照物としたとする解釈もあるが（Ozanne-Revierre 1997: 90）、圧倒的に多くのオセアニアの言語は貿易風を参照物としていただろう、と述べている。François（2004:18）は、「ある言語で、方向を表す軸が東であったからと言って、即ちこれを太陽の動きと結びつける必然性はどこにも無い」とする Palmer（2002:117）の説に言及した上で、次のように述べた。

> かつてオセアニア祖語が話されていた地域に、南東から貿易風が吹いていたことを考えれば、私たちは北西と南東を軸とするコンパスを予測できる。そして「南東方向」（向かい風）を表すのに陸内の上下軸の一つ*sake「上る」を用い、「北西

方向」（追い風）を表すのに同じく上下軸の*sipo「下る」を用いたと考えられる[4]。（略）そして陸内の移動と同じく、向かい風方向でも追い風方向でもない方向には、島内で横の移動を表していた*pano を用いたと推測される。

François（2004: 20）は、貿易風とオセアニア祖語との関係を次のような図で示した。なおこれは引用した François（2004: 20）の Figure9 に執筆者が「貿易風（南東）」とその方向を示す矢印を加えたものである。

図 4 オセアニア祖語の移動動詞（海上）



太陽、そして貿易風という先行研究の二つの論を参考に、ツツバ語話者が他の島へと移動する際、何を基準としていたのかを、移動動詞とそれが示す方向から考えてみる。

今日、ツツバ語話者は、ツツバ島から副都心の置かれるサント島へ頻繁に移動しているが、他島へは滅多に移動しない。そのため、以下に示す例文のうち、サント島（olotu）を目的地とする一文は自然発話文であるが、これを除いた文はすべて調査者の用意したビスラマ語をツツバ語に訳してもらった文である[5]。またサント島を目的地とする文は、ツツバ島に居るときと海上移動中の両状況で得られた文であるが、その他の島への移動を表す文は、ツツバ島で発話してもらったものである。

以下に収集した「私は～に行く」という意味の文を示す。文頭の ka=は、動詞をホストとする一人称単数未然法の主語代名詞であり、動詞に後続する語は島の名前である。

[4]François（2004）は祖語の風の名称を例に自説の根拠を示しているが、本論文には直接関わりが無いため、説明の箇所は省略した。

[5]現在に至るまで、ツツバ島から他島への移動を表す自然発話文の中で、方向の指示代名詞を含むものはひとつも得られていない。これには島が離れすぎていること、ひとつの方向に複数の島が線上に重なり抽象的過ぎること、具体的に目的とする島が決まっているのに敢えてそれを伝えず指示代名詞を用いるのが不自然であることなどの理由があると考えられる。

(53)ka=sa　Olotu（Santo 島）

(54)ka=va　Malakula
Tanna
Omboe（Ambae 島）
Maewo
Paama
Pentecost
Ambrym
Natamambo（Malo 島）
Vila（Efate 島）[6]

(55)ka=si　Banks
Epi
Torres islands（群島）

これらの例文から、ツツバ島から他の島への移動には、島内の移動と同じく sae の異形態 sa「上る」、vano の異形態 va「行く（横）」、sivo の異形態 si「下る」の三語が用いられることが分かる。またツツバ島からサント島への移動のみ sa「上る」が用いられ、それ以外の島への移動には va か si が用いられることが分かる。サント島への移動を意味する sa の考察は次の章で行うことにし、まずそれ以外の島への移動に用いられる vano と sivo について考える。

地図上で vano と sivo の境界に線を引くと、図 6 のようにツツバ島から南西－北東の方向に線を一本引くことができ、この線により二分割された空間のうち境界線から下側への移動は vano、上側への移動は sivo が用いられていることが分かる。

[6]往々にしてエファテ（Efate）島は、ポートヴィラ（Port vila）という都心部の置かれる地名で呼ばれることがある。

図 5. ツツバ島からの移動に用いられる動詞

（塗りつぶされているのがツツバ島）

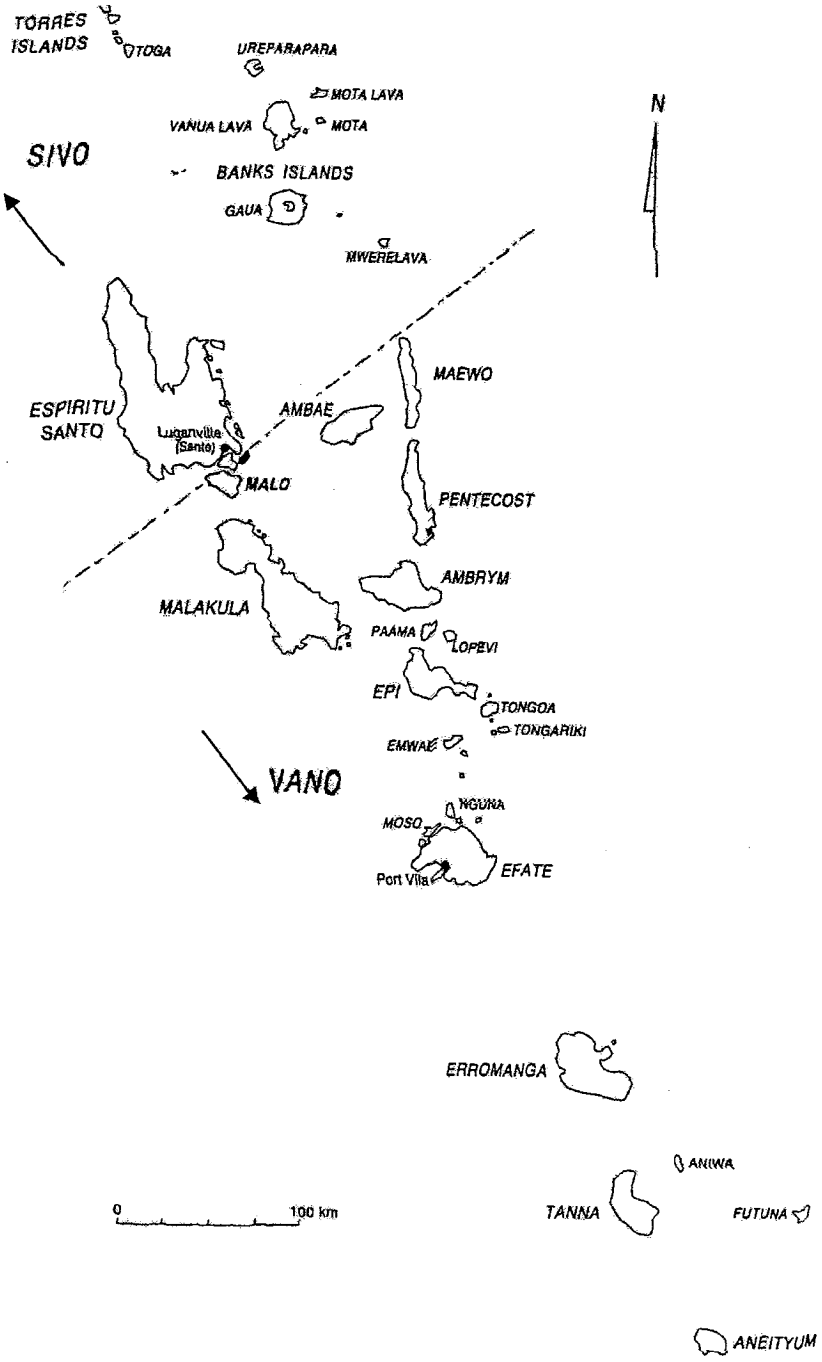
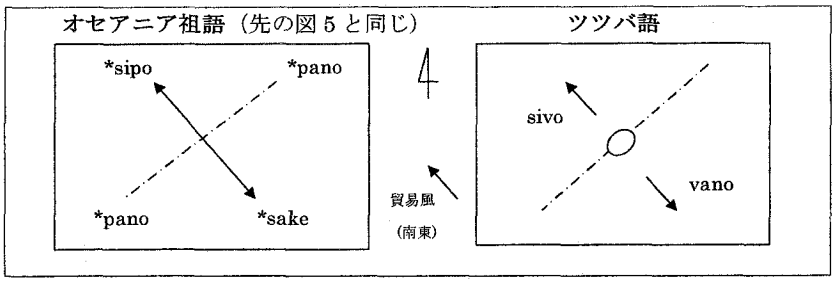


図5は海上移動の方角とそれに呼応する移動動詞を祖語とツツバ語で比較したものである。ツツバ語では空間が図のように2分割され、祖語の*panoが示す南西、北東の方向を表す語はない。この図から、確かに太陽の上る東方向への移動をvano、下る方への移動をsivoと解釈することは不可能とはいえないが、むしろこの二分割されたエリアを、偏西風に対して『向かい風』となる南東方角の移動にはvano「上る」、偏西風が『追い風』となる北西方角の移動にはsivo「下る」が用いられると考えるのが自然である。

図6. 海上移動で用いられるオセアニア祖語とツツバ語の移動動詞



しかし偏西風を基準とした海上（ツツバ語では島間）の移動において、なぜツツバ語では祖語の*sake、*sipoに由来するsae「上る」とsivo「下る」ではなく、島内で横の移動を表すvanoとsivoが用いられるのかという問いが残る。

その理由はサント島とツツバ島との関係に見出すことができる。ツツバ島からサント島への移動にsae「上る」が用いられるのは先に例文（53）で示したとおりである。またサント島からツツバ島への移動にはsivo「下る」が用いられる。なぜツツバ語ではsaeがサント島への移動にのみ用いられるのか。Ozanne-Rivierre（1997）は、メラネシアでは空間表現が土地の高低という対に依拠しているが、この対はさらに拡張され、社会的関係や精神的崇拝へも適用されると述べている。彼女はその例としてニューカレドニアの言語を挙げ、上方向への動きを表す語は、物理的な位置だけではなく自分よりも地位の高い人が居る場所への移動も表すことを示した（Hislop 2001）。またDonohue（1999）は、インドネシアのスラウェシ地域で話されるTukang Besi語では土地の高低に基づいた方向を表す語が、社会的、政治的、文化的中心への移動と、中心から遠ざかる移動とを意味すると述べている。

これらの先行研究を基に考えると、副都心が置かれ、商店や病院、中・高等学校の存在するサント島への移動に移動動詞 sae「上る」が用いられるのは、ツツバ語話者がサント島を社会、政治、文化、経済の中心である上位の存在として位置づけているからであると予測される。ただし先の例文で見たように、首都の置かれるエファテ島への移動には sae「上る」ではなく vano「横切る」が用いられ、vano はエファテ島以外の島への移動にも用いられることを考慮すると、上位/下位の概念だけが関係しているとは考えにくい。

エファテ島とサント島の大きな違いとして、島の発展度ではエファテのほうが上であるが、サント島はツツバ島から距離が近く、人々のサント島への移動はエファテ島への移動に比べて圧倒的に多い、という点が挙げられる。さらにサント島への移動に用いられる sae/sa は、ツツバ島の近隣の島への移動には用いられない。これらを考慮すると、サント島への移動を表す語には、発展度合いやツツバ島からの近さではなく、ツツバ語話者にとって密接であるかどうか、すなわち緊密度が関係していると予測できる。つまり、サント島への移動とその他の島への移動を表す動詞が異なるのは、上位/下位概念、緊密度の両方が反映されているからであると結論付けることができる。

5. 結論

本稿ではツツバ語の指示代名詞を、指定の指示代名詞、場所を表す指示代名詞、物を表す指示代名詞、方向を表す指示代名詞の 4 つに分類した。

それぞれの指示代名詞の形態的特徴は次の表に示すとおりである。方向を表す指示代名詞を語根と考えると、指定、場所、物を表す指示代名詞はいずれも語根に接頭辞 ha-や ne-、ma-が付加された形で表される。ただし場所を表す指示代名詞の抽象的遠称はこれに当てはまらない。また方向を表す指示代名詞だけは語根を同じとせず、形態的に他と明らかに異なることからこの表には含めていない。他と異なる理由としては、方向を表す指示代名詞が移動動詞から派生したからであると考えられる。

表 4. 指示代名詞の語根に付加する形態素

		近称	中称	遠称
語根		nende	nei	leng
指定		ϕ-	ϕ-	ϕ-
場所	具体的	ha-	ha-	ha-
	抽象的	ne-	ne-	?ne-na/ne-natu
物		me-	me-	me-

続いてこれらの統語的な働きを示す。指示代名詞を次の 5 つの観点から分析したものが表 5 である。この表からは、場所を表す指示代名詞と方向を表す指示代名詞は、ほぼ同じ統語的働きをすることが分かる。

(1) 名詞句主要部を修飾できるか（前方照応も含む）

(2) 名詞句の主要部となることができるか

(3) 文全体を修飾する副詞的働きをしうるか

(4) 述語になることができるか

(5) 関係節を導くことができるか

表 5. 指示代名詞の働き

	名詞修飾	名詞句主要部	副詞的	述語	関係節
指定	○	−	−	−	△
場所	−	−	○	−	−
物	−	○	−	−	−
方向	?−	−	○	−	−

注）△… 近称の nen のみ関係節を導くことが出来る

?… 得られたコーパスからはこの指示代名詞が名詞を修飾する例は見つかっていないが、作例して確認していないため断定はできない

最後に方向を表す指示代名詞の基準をまとめた表を以下に示す。島内、サント島へ、サント島以外の島への三つの方向表現や移動表現を見た結果、ツツバ語では移動を表す 3 語の基準が、島内と島間（サント島、サント島他）では異なることが分かった。島内では地形に基づく上下（高低）を基準としており、方角を示唆しうるのは横の一方向を表す語だけであった。一方、他島への移動では、サント島への移動とそれ以外の島への移動が区別され、サント島へは島間の社会的、経済的な力関係や緊密度が基準であるの

に対し、それ以外の島へは貿易風が基準とされていた。

表 6.　方向を表す指示代名詞の基準

	島内	島外	
	ツツバ島内	サント島へ	サント島以外へ
	土地の高低	**上位/下位、緊密度**	**貿易風**
tisan/ tisianatu	丘方向（高）	上位 緊密度高	
tisin/ tisinatu	海方向（低）、横（北東）方向		貿易風に対し、追い風方向（北西）
tivan/ tivanatu tivamba	横（南西）方向		貿易風に対し、向かい風方向（南東）

略号一覧

1,2,3,	人称	LINK	連結辞
ANA	前方照応（場所）	NEG	否定接語
ART	冠詞	OBJ	対格補語
CLASS	類別詞	PL	複数
CONJN	接続詞	POSS	所有者代名詞
DX	指示代名詞	PP	前置詞
IMP	命令法	R	既然法
INC	包括形	REF	前方照応
IR	未然法	PROG	進行相
ITR	自動詞化	SG	単数

先行研究

Donohue, Mark. 1999. *A Grammar of Tukang Besi.* Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

François, Alexandre. 2004. Reconstructing the Geocentric System of Proto-Oceanic. *Oceanic Linguistics*, 43: 1-31. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hyslop, Catriona. 2001. *The Lolovoli dialect of the North-East Ambae language, Vanuatu.* No. 515. Canberra: Pacific Linguistics.

Jauncey, Dorothy. 1997. A grammar of Tamambo, the Language of Western Malo, Vanuatu. Unpublished PhD thesis, Australian National University.

Summary

Tutuba demonstratives

Maho NAITO

This paper sets out to examine Tutuba language demonstratives based on my own fieldwork data. The Tutuba language is one of the vernaculars of the Republic of Vanuatu and is now supposedly spoken by less than 500 people.

This study establishes the types of demonstratives that exist in the Tutuba language, and what the criteria are for the classification. I analyze the native informant data, and identify four types of demonstratives:

① determinative demonstratives,

② independent demonstratives,

③ distal and proximal demonstratives, and

④ directional demonstratives.

I also show that each of them has different criterion for meaning, morphology and syntax.